

なぜ我々は生きてゐるのか？

Why are we living?

富田 守

Mamoru TOMITA

(お茶の水女子大学)

1. はじめに

我々の宇宙は約百三十七億年前に出来たとされる。その時、時間と空間、物質が形成され、物質の密集は銀河と無数の光り輝く星を生み出した。星々は銀河を形成し、銀河は宇宙の大規模構造を造った。さらに、星々のライフサイクルの中で多くの種類の元素が形成されたのである。星形成の残余物質からは惑星も出来た。

これらすべての中で、プロセス、組織化、分化などのいろいろな変化が起こつてをり、すべては宇宙が長く続くような方向に向つてゐると考へられる。

2. 宇宙と自己維持

宇宙そのものがきわめて巨大で、しかも長い間存続するためには、物質の最小単位粒子の質量はかなり小さな値でなければならないし、また、宇宙存続に関係する宇宙定数はもつとはるかに小さな値でなくてはならないが、それらの値は実際にさうなつてゐる。

重力定数も非常に小さな値のものであるが、そのために星は非常に大きくなつて、中心部に核融合反応が生じるほどの物質の集積が可能になり、その結果長い年月光り輝くことが出来るのである。

同様に、原子の内部でも安定した原子核が形成される様に、質量の大きさや粒子間に働く諸力が決められてゐる。これらすべてのことは、宇宙そのもの、物質そのものが、出来るだけ長く安定的に存続するように形成されてゐることを示してゐる。これを「自己維持、自己存続」への原理と名づけることが出来よう。

3. 生命と自己維持

我々の住む太陽系の第三惑星地球は約四十六億年前に出来たらしいが、宇宙や太陽系が長く存続したおかげで、そこで生命が発生し、進化を続けることが出来た。二十数億年かけて細胞レベルの生命に達した後、生命はさらに十数億年かけて進化を続け、約五億年前にやつと我々の先祖に当たる魚類が現れた。以後、魚類は両棲類、爬虫類を経て、哺乳類へ進化してきたとされる。

生命体の活動の意味は、個体維持と種族維持である。そのために代謝活動があり、生殖活動がある。両方に共通な原理は「自己維持、自己存続」である。代謝は短期的な自己維持であり、生殖は長期的な自己維持である。また、成長は個体の自己維持能力を発達させる現象であるし、進化は環境によりよく適応することによつて種族の自己維持を達成しようとする現象である。だからすべての生命の根本原理も宇宙と同様に、「自己維持、自己存続」であると思はれる。

4. 人類と文明

哺乳類の中で樹上生活に適応した霊長類の一部のものが、数百万年前に直立姿勢をとる人類へと進化した。人類は石器や火を使い、文化を持った生活をする種族として発展した。それまでの生物進化、特に脊椎動物の進化では、脳の発達が一貫して見られるが、その中でも一段と発達した脳を持つ生物種が人類である。人類の脳容積は原人段階で高等霊長類段階の脳容積の約二倍になり、ホモ・サピエンス段階で約三倍の脳容積に達した。そして人類はこのホモ・サピエンス段階の途中で、精神の世界を獲得したと考へられてゐる。

人類の発達した脳は、原人段階において人類特有の生活方式である文化を生んだ後、ホモ・サピエンス段階になるとさらに大きな発達を遂げて、遂に精神といふ素晴らしいものを生み出したのである。そして、脳はその後さらに発達を続け、文明を生み出し、近年高度な科学・技術や高い精神文化を生み出してきた。

しかし、この高度な科学・技術や高い精神文化は、人類が生き物として生きていくために絶対必要なものだろうか？ 採集・狩猟社会の人たちが自然とうまく折り合ひをつけて生活してゐるのを知ると、疑念を感じるのである。しかし、人類が文明段階に達し、高い精神文化を持つようになり、遂には高度の科学・技術まで有するに至つた流れには、何か意味があるのかも知れない。

5. 人類から生命、宇宙へ

では、何で脳が発達し、文明とか精神が発達したのであろうか？

知的精神に基づく文明の発達は、自己や周りの環境を理解し、制御する力を人類に与へてくれた。宇宙から生命までのすべての活動に自己維持や自己存続の原理があることも知つた。また、人類は宇宙や生命の諸力を利用して生活する技術力も発達させてゐる。人類が惑星環境を離れて、宇宙に居住出来るようにするのも文明の発達のお蔭である。だから、文明がさらに発達すれば、その能力を人類以外の生命体やその他の自然環境の自己維持にも役立てることが出来るし、この能力を宇宙にも生かすことが出来るであらう。文明の中でも特に科学・技術は、さういふ力を有してゐる。

つまり人類は、究極的には科学・技術を通して全生命や宇宙そのものの自己維持や自己存続に貢献出来るのではないだろうか？ これは宇宙が長く続き、生命が進化をして知性体を生み出すに至つたために可能になつたことであらう。

人類の一員としての我々個人個人は、そんな大役を担へる自信は殆どないけれども、クールに受け止

めて考へれば、これは人類にしか出来ないことであり、ある意味で人類に課せられた使命、宇宙における人類の存在意義ではないかと考へられる。我々はそのために存在し、日々勉学をし、社会を維持発展させてゐるのではないだろうか？ だから、それに反する愚かしいもろもろのことは、即刻やめた方がいいのではないだろうか？

我々は大宇宙と地球の存続と、地球で生まれた生命の進化と発展に感謝し、それに応へるべきである。我々は宇宙と生命の自己維持の原理に則つてこれまでの自分を反省し、自然や環境、周りの人々に「配慮」しながら日々を有意義に送るべきではないだろうか？

6. おはりに

それにしても、長らく人類学を研究してきた者が定年になつて広く人類を見ることが出来る様になつたとき、現在の科学・技術の急速な発達を伴ふ文明の発展に対して、生身の人類の身体、特に脳の精神機能がそれについていけない状況になつてゐるのではないかといふ危惧の念を覚えてしまふのである。すなはち、「もうホモ・サピエンスは古い」もしくは、「もうこれまでのホモ・サピエンスでは駄目だ」といふ思ひを強く感じるのである。

この考えはまったく新しいものではなく、すでに何十年も前に京都学派の人たちによつて、「今後、精神の進化が望まれる」といふ言ひ方で表明されたものに近い。

違ふ点は、当時はある程度夢と希望を込めて語られたのに対し、現在の私は人類自滅の強烈な危機感を持つて語つてゐる点である。